

## 公表 事業所における自己評価総括表

○事業所名	まなびや 千人町教室		
○保護者評価実施期間	令和8年2月16日		令和8年2月28日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	44	(回答者数) 20
○従業者評価実施期間	令和8年3月16日		令和8年3月20日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	5	(回答者数) 5
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年3月23日		

## ○分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	分子栄養学に基づいた補食の提供を通じて心身の健やかな成長をサポートしている。	分子栄養学に基づき補食の提供を行っている。療育中に提供する「補食(おやつ)」はミネラル分やタンパク質等の栄養素を含む心身の発達にとって良い食材(主にたんぱく質の多い食べ物)を提供している。例えば、卵、納豆、焼き鳥、豆腐、サラダチキンなどである。補食の食材を子どもと一緒に買い物に行き、食材や栄養についても教えている。補食の際には「いただきます」等の感謝の気持ちを込めた挨拶や食事のマナー、パッケージを開けたり、卵を割ったり手先の微細運動などの指導も行い、補食を通じて子どもの健やかな成長をサポートしている。	子ども一人ひとりの発達段階や体調、嗜好に応じた個別の栄養サポートをさらに充実させていく。視覚的に分かりやすい教材(食材カードや栄養バランス表等)を活用し、楽しみながら栄養知識を身につけられるよう支援していくことも有効だと考える。加えて、補食後の体調や集中力の変化にも着目し、その効果を職員間で共有・検討しながら、より質の高い支援へとつなげて今後は、専門職との連携や研修の実施により職員の専門性を高めるとともに、家庭でも実践可能な補食の提案や情報発信を行い、施設と家庭が一体となって子どもの健やかな成長を支えていく体制を強化していく。
2	基礎学力と豊かな人間関係を生きる力とみなし、療育の中で学習支援をおこなっている。	まなびやでは読み書き計算などの基礎学力、豊かな人間関係を築くためのコミュニケーション力、元気な心と丈夫な身体を将来的に自立して「生きる力」と考え、療育の中で読み書き計算などの基礎学力を養うための学習支援を行っている。事業所には教員・教諭経験者も多く配置されており、子どもに積極的に働きかけ学校の宿題中心に丁寧に学習指導を行う時間もある。このように学習支援に対する保護者の高いニーズに応えているが、福祉サービス事業所であり、受験対策はおこなっていない。	子ども一人ひとりの学習状況や理解度、特性に応じた個別支援計画をより充実させ、無理のないステップで基礎学力の定着を図っていく。学習のつまづきを早期に把握し、反復やスモールステップによる指導を通じて「わかる」「できる」という成功体験を積み重ねていく。また、読み書き計算に加え、日常生活に結びついた実践的な学び(時間の理解、金銭感覚、文章理解等)も取り入れ、将来的な自立につながる力を育てていく。あわせて、子どもの集中力や意欲を高めるために、教材や指導方法の工夫を行い、楽しみながら学べる環境づくりを推進していく。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	療育時間、送迎時間、事務処理をするのに時間がかかり、情報共有や教材研究の時間を割きたい。	療育時間、送迎時間、事務処理に時間を要している要因として、利用児童ごとの支援ニーズの多様化・個別化が進んでいることが挙げられる。それに伴い、支援内容の検討や記録の詳細化が必要となり、業務量が増加している。また、安全面への配慮や丁寧な対応を重視していることから送迎時や療育に時間を要しやすい状況にある。加えて、突発的な対応(体調不良、情緒面の変化、保護者対応等)が発生することで、計画的に時間を確保することが難しくなっている点も要因である。	業務の効率化を図るため、役割分担の見直しや業務の標準化を進めていくとともに、事務処理能力のスキルアップにより事務処理時間の短縮を図っていく。職員間での情報共有や教材研究の時間を意図的に確保するため、定期的なミーティングの設定やスケジュールの見直しを行っていく。加えて、短時間でも効果的に情報共有ができる仕組み(共有ノートやデジタルツールの活用等)を整備し、日常的に質の高い療育につなげていく。今後は、業務全体の見直しを継続的に行いながら、職員が専門性を発揮できる環境を整備し、より充実した療育の提供につなげていく。

2	<p>必要に応じて、子どもが地域の資源を利用し、多様な体験や交流ができるよう支援を行いたい。</p>	<p>地域資源を活用した多様な体験や交流の機会が土曜日に集中している。その要因として、平日は学校ごとに下校時刻が異なり、活動時間の確保が難しいことが挙げられる。また、活動時間が限られる中で安全に配慮した支援を行う必要があり、十分な人員配置を確保する観点からも、平日の実施が難しい状況となっている。</p>	<p>平日においても地域資源を活用した体験の機会を確保できるよう、短時間でも実施可能なプログラムの検討を進めていく。例えば、事業所内で完結できる形で地域の方や専門職をゲストとして招き、交流や体験の機会を創出していく。また、活動内容や実施方法を工夫し、限られた時間の中でも充実した経験が得られるよう計画していくとともに、安全面に配慮した無理のない運営体制を整えていく。今後は、平日と土曜日のバランスを見直しながら、子どもが継続的に多様な体験や交流ができる環境づくりを推進していく。</p>
---	--	--	---